

小さな診療所の出来事 1

船橋ファーム・アシスト・サービス
獣医師 船橋 史憲

今年の4月に1群12,000羽で4群を飼育する農場より、1群で1日に2~7羽位の死亡が数十羽に急増したと、診断の依頼がありました。

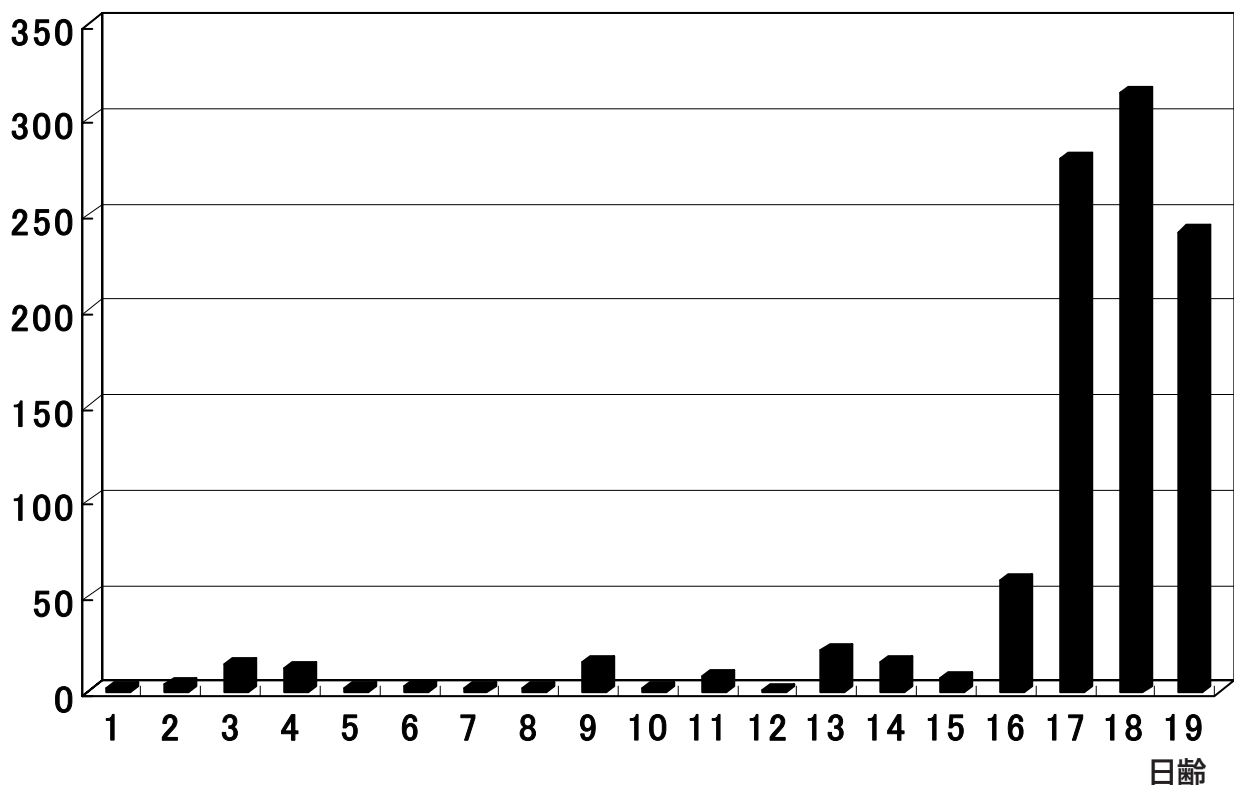
グラフは発症群の死亡羽数の推移です。病性鑑定を行った死亡鶏6羽(♂5、♀1)に痩せているものはなく、19日齢としては普通より大きいぐらいでした。

但し病変は激しく、脂肪肝、肝腫脹、心筋の出血、筋胃潰瘍、腎炎(尿酸沈着)、脚筋の点状出血などが見られ、発生日齢、急性発症、急性死の状況から、また昨年の7月に同様の発生状況でウイルス分離までした例と比較して、鶏アデノウイルス1型によるものと診断しました。

この群は3月25日に餌付けしたチャンキー種のE孵化場の雛で、種鶏は21年8月に餌付けした産卵ピーク過ぎの若いものでした。他群は3月1日餌付け(病性鑑定時42日齢)、3月9日餌付け(同34日齢)、3月16日餌付け(27日齢)で同一孵化場の雛でしたが、異常はなく、アデノウイルスの性質から、もし他群に免疫がなく、水平感染が生じて発症は無いし、対策はないが当群もあと数日で治まるであろうと、農場には伝えました。後日の聞き込みによると推定どおり25日齢で収まり、またこの発症した群のみ新しい種鶏由来の雛でした。他農場でも同一種鶏由来の雛で同様の発症があり、ほとんど同じ時期に急死し、被害の程度は違いますが暫くすると自然に落ち着いたとのことでした。

原種の大きな変換期に生じた事件でした。今後はこのウイルスの種鶏での浸潤状況を把握しつつ、優秀な種鶏用アデノウイルスワクチンの出現を心待ちにしているところです。

死亡羽数



主に鶏アデノウイルスによる死亡羽数